誕生日に食べたい料理の絵から見える 小学生の食嗜好—日韓比較—

鎌田早紀子*・李 温九*・章 貞玉**・冨田圭子*・
大谷貴美子*

(*京都府立大学, **Kyungwon University)

Food preference of school children based on their drawings of dishes that they want to eat on their birthday —Comparative studies between Japanese and Korean school children—

Sakiko Kamada*, Onkoo Rhee*, Jeong-Oak Jang**,
Keiko Tomita*, Kimiko Ohtani*

*Kyoto Prefectural University: 1-5 Hangi-cho, Shimogamo, Sakyo-ku, Kyoto, Japan 606-8522

**Kyungwon University: San65, Pokjong-Dong, Sujong-Gu, Songnam-Shi, Kyonggi-do, Korea

*〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

** San65, Pokjong-Dong, Sujong-Gu, Songnam-Shi, Kyonggi-do, Korea

Based on the hypothesis that the dishes school children to want to eat on their birthday must be the dishes that they love, the food preference of school children (in the 1st-6th grades) was investigated in Kyoto, Japan and in Seoul, Korea. Although the total number of varieties of menus drawn was more by the Japanese pupils than the Korean pupils, the number of menus drawn by one pupil was less by the Japanese pupils than the Korean pupils. This means that the preferred menus of Korean pupils more resembles each other, and that of the Japanese pupils were different from each other depending on their diet experiences. Through their drawings, the progress of socialization of the diet life of pupils and their food preference to Western-style dishes and meat dishes were shown to be promoted in both countries. Traditional dishes on special days in both countries were not the dishes that the pupils wanted to eat.

緒言

食の外部化, 社会化が進む中で, 生活習慣病の低年齢化, 咀嚼異常, 肥満・やせ, 低体温など食生活が原因と思われる子どもの健康に関わる様々な問題がクローズアップされ, 幼少期からの食育の重要性が叫ばれている^{1)~5)}。小学校における食に関する指導の目標の中には, 「自己管理能力の育成」が掲げられている^{6), 7)}が, どのような食物をどのように食べるかは, 生きていく上で直接的に健康に影響を与える重要な要因である。

ところで食嗜好は人間が食物を選択する際に, 行動を規定する大きな要因の1つである。食嗜好の基本は, 主として幼少期から家庭でどのようなものを食べてきたかによって影響されるが, 学童期に入って経験する学校給

食や食に関する指導によって, 食の世界が広がっていくと, 食嗜好もある程度は修正されていく。従って, 学校教育における効果的な食教育を行うためには, 学童期の児童の食嗜好を的確に把握することが, 指導計画を立てる上にも重要なことと言える。

小学生の嗜好調査は数多く成されているが^{8)~10)}, 多くはアンケート調査によるものである。また絵から小学生の食生活の実態を探ろうとする試みは, 動的描画法を利用した足立らの研究が知られているが¹¹⁾, 本調査は, 誕生日に食べたいものであれば, 好きな食べ物, 食べたい料理を描くであろうと考え, 誕生日に食べたい料理を描いてもらうことで小学生の食嗜好とともに, 食の拡がりを探ろうとしたものである。絵にすることで, 低学年の児童から高学年の児童まで楽しく取り組めること, 絵

には食嗜好だけでなく、児童の食経験が表現され、食に関するより多くの情報が得られると考えた。

そして、こういった1つのテーマに関する描画が効果的な食教育を行うための有効な手段となり得るかを検討した。

併せて、食文化の異なる韓国においても、同じ調査を行い、社会的背景の違いや食経験が小学生の嗜好や食の捉え方にどのような影響を与えているのかについても比較検討を行った。

方 法

1. 調査対象者

京都府下および韓国ソウル特別市内の小学校1校に協力を仰ぎ、1年生から6年生までの全校生を対象に2002年7月～11月にかけて調査を行った。調査対象児童数は、表1に示すように日本348名（男子166名、女子182名）、韓国302名（男子124名、女子178名）である。

表1 調査対象者の人数

学年	日本		韓国	
	男子	女子	男子	女子
1年生	34	33	20	29
2年生	21	37	24	27
3年生	30	31	17	32
4年生	31	20	14	36
5年生	29	37	29	27
6年生	21	24	20	27
合計	166	182	124	178

2. 調査方法

「今日はあなたのおたんじょうびです。がようしをテーブルだと思って、食べたいお料理の絵を色えんぴつやクレヨンをつかって、すきなだけかいてください。かいたお料理の名前も、いっしょにかいてください。」という文章を画用紙に印刷したものを児童に配布し、子どもたちに絵を描いてもらった。韓国での調査は、ハングル文字で同じ文章を印刷した画用紙を日本から送付した。調査は各学校の学級担任に任せた。

絵を描くための時間は、日本の場合、4年生（説明は学校で、絵は宿題）を除き、全て授業時間（図工または学級活動）1時間（45分）である。韓国では、すべての学年において図工の時間（45分）が当てられた。

3. 絵の分析

描かれた「誕生日に食べたい料理」は、まず料理とデザート（果物含む）、それ以外のもの（果物以外の食材そのものが描かれていたもの、食べ物とは考えられないもの）に分類し、また料理は和食（韓国の場合は韓国料理）、洋食、中華、その他に分類し、各々、その種類と出現頻度を分析した。西洋料理の付け合せは、独立した料理としては扱わずに、それを含む料理と一体のものとして集計した。和食のうち、にぎり寿司は、1回の食事

で数種類のにぎり寿司を食べることが普通であることから、1枚の画用紙に数種類のにぎり寿司が描かれていた場合も、ネタの違いでは分類せず、にぎり寿司とし、ネタの種類を別途数えた。また、出現頻度の高かった料理のうち、唐揚げは中華料理として数え、チキンナゲットは洋風料理とした。また、骨付きのチキン、もち手に飾りが付けられたチキン料理については、ローストチキンとして西洋料理として扱ったが、中には揚げた物もあり、区別するのが難しいことから、学年別に料理の出現頻度を比較する際には、まとめてチキン料理とした。統計処理には、Excel 2000を用いた。

結果および考察

1. 料理の種類とその出現頻度

小学生が描いた料理を料理とデザート、それ以外のものに分類したところ、それ以外のものは全体でも僅かであったので、本研究では、それ以外のものを除き、料理とデザートについて分析を行った。

日韓比較をおこなった結果、料理は日本171種類、韓国113種類、デザートは日本118種類（内果物23種類）、韓国79種類（内果物17種類）といずれも日本の方が多く描かれていた。日本の場合、特にご飯ものの種類、中でもすしの種類（にぎり寿司、まき寿司、盛り合わせ寿司、ちらし寿司、ばってら、いなり）と丼の種類（牛丼、かつ丼、親子丼、イクラ丼、ウニ丼、ウナギ丼（重）、アナゴ丼、マグロ丼）が多いことと、デザートではショートケーキの種類が多いことが特徴的であった。また1枚の絵に描かれた料理とデザート合わせた全品目を100として、その中に占める料理の割合を日韓で学年別に比較したところ、図1に示すように、日本の男子は1年生を除きデザートより料理を描いた割合が高く、学年を追うごとに料理の割合が増加する傾向が認められた。女子では男子よりデザートの割合が高い傾向を示した。日本の1年生は韓国の1年生と比較してデザートの割合が高か

図1 画用紙に描かれた全品目のうち、料理の占める割合

図2 日本の小学生が描いた料理の種類 (%)

ったが、内容的には果物が多かった。1年生男子の71%、女子の79%が何らかの果物を描いており（果物を描いた児童は、一人当たり男子3.1種類、女子4.2種類の果物を描いていた。）、またいずれの学年も女子は男子より果物を描いた割合が高かった。韓国の1年生が料理を描いていることを考えると、料理の絵を描くのが難しかったとは考えにくく、日本の小学生は実際に果物が好きなのかも分からないが、このような結果となった。出現頻度の高かった果物は、上位よりブドウ、リンゴ、イチゴであった。描かれた料理を和食、洋食、中華、その他に分類し、どのジャンルの料理が多く描かれたかを学年別に比較したところ、図2、3に示すように、日韓ともに西洋料理の割合が高く、自国の料理よりも西洋料理に対する嗜好が進行していることが示唆された。また描かれた料理の種類は、図4に示すように日本の小学生は学年を追うごとに増える傾向にあり、特に1年生から2年生の間で増加が顕著であった。これは先にも述べたように1年生は果物の割合が高かったためである。韓国では学年、性別による違いは殆ど見られず、全体的に日本に比べ出現する料理の種類は少なかった。4年生の女子が突出して多くの種類の料理を描いていたが、その理由については現在のところ不明である。

日本の場合について、1～3年生の低学年と4～6年生の高学年に分けて、出現した料理の種類に違いがあったかを比較したところ、特に井ものが3種類から11種類に、刺身を含む魚介類の料理が17種類から26種類に、肉

料理は5種類から15種類へと高学年になるにつれて出現した料理の種類が増加し、食体験の拡がりが見られた。そこで、一人当たり平均何種類の料理を描いたかを検討したところ、図5に示すように5、6年生の男子を除き日本は韓国に比べて少ないことが示された。つまり、先の出現した料理の種類の高さを考えると、日本の小学生は、一人一人が異なる料理を描いたこと、一方、韓国の小学生は一人当たりでは多くの料理を描いたが、同じ料理が多かったことを意味する。

そこで、どのような料理が多く描かれていたのかを比較するため、学年別に上位3種類の料理と、その料理を描いた児童の割合を図6、7に示した。出現頻度の高かった料理は、日本では、低学年と高学年では若干の違いが認められたが、すし（すしを描いた小学生は132名で、そのうち74%はにぎり寿司を描いた）、ピフテキ、チキン料理（唐揚げ、チキンナゲット、ローストチキン）、韓国ではビザ、ハンバーガー、チキン料理であった。そして、それぞれの料理を描いた児童の割合を日韓で学年別に比較してみると、先に述べたように、韓国の方が明らかに同じ料理を描いた児童の割合が高く、誕生日に食べたいと思う料理が偏っていることが示された。調査当時、韓国では、誕生日のパーティをファストフード店で行うことがはやっており、こういった背景が小学生の描いた料理に偏りを生じた原因と考えられた。

また料理を肉料理と魚料理に分類し、その学年の何割の児童がそれらの料理を描いたかを比較したところ（表

図3 韓国の小学生が描いた料理の種類 (%)

2), 日韓ともに学年, 性別を問わず肉料理を描いた児童の割合の方が多かった。この傾向は, 特に日本の女子と韓国で顕著であった。肉料理としては, 日本の場合, チキン料理, ステーキ, ミートボール, ハンバーグ, 焼肉, しゃぶしゃぶ, すきやき, トンカツ, 韓国ではチキン料理, タクトリタン, ブタのあばら焼き, ブルコギ, ハンバーグ, ミートボール, 酢豚であった。また魚料理では, 日本は焼き魚, 刺身, フグしゃぶ, エビフライ, エビチリ, サーモンマリネ, 韓国では刺身, 魚フライ, エビフライ, イカリングフライ, エビの塩焼きであった。しかしながら, 日本の場合, にぎりずしのネタ (全16種類) としては, かなりの種類の魚が登場しており, 魚料理の種類が少ないことが, 魚が嫌いということを意味するものではないと思われる。

2. 小学生の誕生日に食べたい料理

小学生にとって, 誕生日に食べたい料理は家の外で食べる西洋料理やファストフードのようである。絵1は日本の5年生女子が描いた絵であるが, チェーン店のラーメン, ジンジャーエール, 居酒屋メニューと思われる軟骨の唐揚げ, 回転寿司と思われるにぎりずし, 松阪牛のステーキなどが描かれており, この児童の外食経験の豊富さが伺える。しかしながら, この絵の中には, 家庭で作られたと思われる料理は一品も描かれていなかった。日本の小学生が一枚の画用紙に描いた全料理 (料理とデザート) に占める外食 (宅配を含む) と思われる料理の割合を算出したところ, 平均約20%であった。日本の6

年生男子は, 特にその割合が高かった (60%) が, 何故6年生男子のみにこういった傾向が認められたのかについては今後さらなる検討が必要と思われる。しかし, これらの数字は明らかに外食と思われるもの (店名のあるものや盛り付け方から判断) のみを集計したもので, 実際はもっと高い割合になるものと思われる。外食と思われる料理は, 寿司 (特に握りずし), 丼物, ハンバーガー, ラーメン, ビザなどである。

一方, 家庭での手作り料理が子どもたちにとって意味のある料理となっている例も示された。「お父さんが作ったオムレツ」 (絵2), 「お母さんが作ったお子様ランチ」, 「自分とお母さんの手作りケーキ」など, わざわざコメントのつけられた料理の絵が数人の児童に描かれていた。その料理は, 描いた児童にとっては, 親の愛情を感じることでできた忘れ難き料理だと思われる。食べ物に親のメッセージを託すことが難しい現代ではあるが, これらの絵からは, こういった形で親子の関わり方の重要性を改めて考えさせられた。

以上のように, 日韓ともに子どもたちが誕生日に食べたいと思う料理は洋食であり, 魚より肉料理であり, ファストフードであった。

3. 伝統的な祝いの料理について

日本の伝統的な祝いの料理というと, 赤飯や頭つきの鯛などがあげられるが, 韓国では, 特に誕生日にはわかめスープがなくてはならない料理とされている。絵3のように, 日本の伝統的な祝いの日の料理を描いた児童は

図4 学年別日韓の小学生が描いた料理の種類
(日本 全171種類, 韓国 全113種類)

図5 小学生一人当たりが描いた料理の種類

図6 日本の小学生が描いた料理ベスト3
チキン料理には、唐揚げ、チキンナゲット、ローストチキンが含まれる

図7 韓国の小学生が描いた料理ベスト3
チキン料理には、唐揚げ、チキンナゲット、ローストチキンが含まれる

表2 魚料理、肉料理を描いた児童の割合

国	性別	料理の種類	1年	2年	3年	4年	5年	6年
日本	男子	魚料理	14.7	33.3	30.0	45.2	55.2	23.8
		肉料理	44.1	57.1	86.7	64.5	82.8	76.2
	女子	魚料理	0.0	37.8	0.0	10.0	27.0	8.3
		肉料理	24.2	62.2	61.3	50.0	62.2	54.2
韓国	男子	魚料理	20.0	8.3	17.6	0.0	6.9	57.9
		肉料理	55.0	75.0	94.1	71.4	48.3	78.9
	女子	魚料理	10.3	0.0	0.0	8.3	7.7	34.8
		肉料理	55.2	77.8	73.3	69.4	61.5	87.0

全校生の中で1人だけであった（お頭つきの鯛のみ他1名あり）。韓国においても、わかめスープを描いた児童は、全体の1割にも満たなかった（4年生、5年生男子においては0%であった）。親にとって、子どもの誕生日というハレの日は、親自身も楽しむ、もてなされる日

であるという報告がなされているが¹²⁾、日韓ともに、韓国でのファストフード店での誕生日会に代表されるように、子どもの誕生日には子どもが好む料理を外で食べるというスタイルが定着しているのかも分からない。つまり伝統的なハレの日の料理は、誕生日という子どものハ

「今日はあなたの“おたんじょうび”です。がようしをテーマルだと想着、食べたいお料理の絵を色えんぴつやクレヨンをつかって、すきなだけかいてください。かいたお料理の名前も、いっしょにかいてください。」

絵1 食の外部化を感じさせる例

「今日はあなたの“おたんじょうび”です。がようしをデュードだと思って、食べたいお料理の絵を色えんぴつやクレヨンをつけて、すきなだけかいてください。かいたお料理の名前も、いっしょにかいてください。」

絵2 親子の関わりが感じられた例

絵3 日本の伝統的なハレの食事

レの食卓からは姿を消しているのではないと思われる。

4. ケーキについて

誕生日という場を設定しての絵であったのでデザート
のケーキについて分析を行った。ケーキを描かなかった
児童の割合を調べたところ、図8に示すように、日本では、
全体の約37%（男子44%，女子29%）の児童がケーキを
描かなかった。韓国（全体17%）でも高学年（4～
6年）になるとケーキの絵を描かない児童の割合が増加
した。さらにケーキを描いた児童がどのようなケーキを
描いたかについて検討したところ、日本ではショート
ケーキを描いた児童が高学年で増える傾向にあり、食の
個別化がケーキにも現れていた。それに対し、韓国では
ショートケーキを描いた児童は2人だけであり、ほぼ全
員がホールの丸いケーキや日本ではあまり見られない動
物の形をしたカラフルなケーキを描いていた。誕生日の
シンボルともいえるケーキにローソクを立て、ケーキを
囲んで家族で祝うという姿は、少子化にあって日本の家
庭から姿を消しつつあるのかも分からない。クリスマス
ケーキも、家族の好みがかかれていたので、それぞれが
好きなケーキを選ぶという主婦の発言が報告されてい
る¹²⁾が、個々人の嗜好を尊重した結果の個別食¹³⁾と言え
る。

昭和44年に飲食業の資本が自由化されファミリーレス
トランやファストフード店が誕生していった¹⁴⁾ように、
昭和40年代頃までは、外食は特別な日の食事であり、ケー
キも特別な日にしか食べることのできないご馳走であっ

た。そういった時代は、日常とは異なる食事をする、ケー
キを買うといったことだけでも、誕生日を祝う親の気持
ちを子どもに伝えることができた。しかし、外食は日常
食化し、ケーキは食べたいときにいつでも食べられる環
境にある現在の子どもたちにとって、ケーキが誕生日だ
からといって食べたい食べ物では無いのかもしれない。
つまり、現代は食を通して親の気持ちを子どもに伝える
ことが難しい時代とも言える。

以上、誕生日という子ども達にとって最も身近なハレ
の日に食べたい料理を絵に描いてもらい様々な視点から
分析を試みた。その結果、絵からは小学生の食嗜好や食
経験の拡がり把握できるとともに、様々な問題点を示
された。食育が叫ばれているが教育現場において、食に
関係した身近で描きやすい課題で絵を描かせることは、
児童自ら自分の食生活を振り返る機会ともなり、またそ
の分析結果を指導に反映させることは、食育を効果的に
推進していくうえでも有効な手段となり得ると考えられ
た。

要 約

誕生日に食べたいものは、子どもの好きなものである
と考え、小学生の食嗜好と食の拡がりを探る目的で日韓
の小学生を対象に誕生日に食べたい料理の絵を、画用紙
を食卓に見立てて描いてもらった。

その結果、日韓ともに、自国の料理よりも洋風の外食、

図8 ケーキ類を描かなかった小学生の割合

ファストフードに、また魚料理より肉料理に嗜好が偏っていることが示された。また、描かれた料理の種類を比較したところ、総数は日本の方が多かったが、児童一人当たりが描いた料理の種類は日本のほうが少なく、日本の小学生は各自が異なった料理を描いたことが示され食経験の多様性が示された。また、日韓ともに、伝統的な誕生日を祝う料理は、殆ど描かれなかった。さらに誕生日のシンボルともいえるケーキは日本の小学生の約37%は描いておらず、描かれたケーキもショートケーキが多かった。小学生にとって身近なハレの日である誕生日の食事をテーマに絵を描いてもらうことは、彼らの食嗜好のみならず、食経験の拡がり把握するうえにも有効な手段となりうることを示された。

文 献

- 1) 文部省：食に関する指導参考資料，東山書房，京都（2000）
- 2) 中村丁次：子どもたちへの食教育と学校給食，食の科学，光琳，東京，284，p.7-11（2001）
- 3) 柳沢幸江：咀嚼と健康 よく噛んで食べることの大切さ，食の科学，光琳，東京，274，p.15-21（2000）
- 4) 金田雅代：栄養教諭と食に関する指導，日本食生活学会誌，15（2），p.77-83（2004）
- 5) 真弓定夫：自然にかえる子育て 医者から学ぶ「医者いらず」，芽ばえ社，東京，p.80（2002）
- 6) 厚生労働省雇用均等・児童家庭局：「食を通じた子どもの健全育成のあり方に関する検討会」報告書（2004）
- 7) 中央教育審議会スポーツ・青年分科会：食に関する指導体制の整備について，中央教育審議会答申（2004）
- 8) 日本スポーツ振興センター：平成7年度・平成12年度児童生徒の食生活等実態調査
- 9) 日本子ども家庭総合研究所編：日本子ども資料年鑑2004，KTC中央出版，名古屋，p.167-168（2004）
- 10) 生活情報センター：食生活データ総合統計年報2004年版，生活情報センター，東京，p.305-307（2004）
- 11) 足立己幸・NHK「子どもたちの食卓」プロジェクト：知っていますか子どもたちの食卓，NHK出版，東京（2002）
- 12) 岩村暢子：変わる家族・変わる食卓，勁草書房，東京（2003）
- 13) 加藤純一：飽食ニッポンの夕食を考える―生活原理の不在化と“朝食化”現象―，食の科学，光琳，東京，262，p.20-29（1999）
- 14) 初回・外食産業調査概要，<http://blog.goo.ne.jp/iosy0319/e/12293af86187fa51661b3a86726e099d>